

第2問 梶井基次郎は、大学進学前から肺の病に苦しみながら文学や音楽に熱中していた。大学進学後伊豆の温泉地に転地療養に出かけるなど闘病生活を送りながら、小説を次々に発表したが、三十一歳の若さで永眠した。梶井基次郎の次の小説を読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。(30点)

ある晩春の午後、私は村の街道に沿った土堤の上で目を浴びていた。空にはながらく動かないでいる大きな雲があった。その雲はその地球に面した側に藤紫色をした陰翳を持っていた。そしてその膨大な容積をその藤紫色をした陰翳はなにかしら悲嘆とした悲哀をその雲に感じさせた。

私の坐っているところはこの村でも一番広いとされている平地の縁に当たっていた。山と溪とがその大方の眺めであるこの村では、どこを眺めるにもア勾配のついた地勢でないものはない。風景は絶えず重力の法則に脅かされていた。そのうえ光と影の移り変りは溪間にいる人に始終を与えていた。そうした村のなかでは、溪間からは高く一日の当るこの平地の眺めほど心を休めるものはない。私にとってはその終日に倦いた眺めが悲しいまでノスタルジックだった。Louis-l'etierの住んでいるといういつも午後ばかりの国——それが私には想像された。

1 雲は、その平地の向うの果てである雄木山の上に横たわっていた。雄木山では絶えず杜鵑が鳴いていた。その麓に水車が光っているばかりで、眼に見えて動くものはない。うらうらと晩春の日が照り渡っている野山には静かなもの憂さばかりが感じられた。そして雲はなにかさうした安逸の悲運を悲しんでいるかのように思われるのだった。

(注3) 私は眼を溪の方の眺めへ移した。私の眼の下ではこの半島の中心の山麓からわけ出て来た二つの溪が落ち合っていた。二つの溪の間へ楔子のように立っている山と、前方を屏風のように塞いでいる山との間には、一つの溪をその上流へかけて十二単衣のような山褶が交互に重なっていた。そしてその涯には一本の巨大な枯木をその巔に持つて、そしてそのために殊更感情を高めて見える一つの山が聳えていた。日は毎日二つの溪を渡ってその山へ落ちてゆくのだが、午後早い日は今や一つ一つの溪を渡ったばかりで、溪と溪との間に立っている山のこちら側が死のような影に安らっているのが殊更目立っていた。三月の半ば頃私はよく山を蔽った杉林から山火事のような煙が起るのを見た。それは日のよくある風の吹く、ほどよい湿度と温度が幸いする日、杉林がいつせいに飛ばす花粉の煙であった。しかし今すでに受精を終った杉林の上には褐色がかった落ちつきが出来ていた。瓦斯体のような若芽に煙っていた樺や楠の緑にも初夏らしい落ちつきがあった。開けた若葉が各々影を持ち瓦斯体のような夢はもうなかった。ただ溪間にむくむくと茂っている椎の樹が何回目かの発芽で黄粉をまぶしたようになっていた。

そんな風景のうえを遊んでいた私の眼は、二つの溪をへだてた杉山の上から青空の透いて見えるほど淡い雲が絶えず湧いて来るのを見たとき、知らず知らずそのなかへ吸い込まれて行った。湧き出て来る雲は見る見る日に輝いた巨大な姿を空のなかへ拡げるのであった。

それは一方からの尽きない生成とともにゆっくり旋回していた。また一方では捲きあがって行った緑が絶えず青空のなかへ消え込むのだった。こうした雲の変化はど見る人の心に云い知れぬ深い感情を呼び起すものはない。その変化を見極めようとする眼はいつもその尽きない生成と消滅のなかへ溺れ込んでしまい、ただそればかりを繰返しているうちに、不思議な恐怖に似た感情がだんだん胸へ高まって来る。その感情は喉を詰まらせるようになって来、身体からは平衡の感じがだんだん失われて来、もしそんな状態が長く続けば、そのある極点から、自分の身体は奈落のようなものなかへ落ちてゆくのではないかとと思われる。それも花火に仕掛けられた紙人形のように、身体のある部分から力を失って。――

私の眼はだんだん雲との距離を絶して、そう云った感情のなかへ巻き込まれて行った。そのとき私はふとある不思議な現象に眼をとめたのである。それは雲の湧いて出るところが、影になった杉山の直ぐ上からではなく、そこからかなりの距離を持ったところにあったことだった。そこへ来てはじめて薄り見えはじめる。それから見る見る巨きな姿をあらわす。――

3 私は空のなかに見えない山のようなものがあるのではないかというよう不思議な気持ちに捕えられた。そのとき私の心をふとやすめたものがあつた。それはこの村のある閑夜の経験であつた。

その夜私は提灯も持たないで闇の街道を歩いていた。それは途中にただ一軒の人家しかない、そしてその家の燈がちょうど戸の節穴から写る戸外の風景のように見えている、大きな闇のなかであつた。街道へその家の燈が光を投げている。そのなかへ突

然姿をあらわした人影があつた。おそらくそれは私と同じように提灯を持たないで歩いていた村人だったのであろう。私は別にその人影を怪しいと思つたのではなかった。しかし私はなんというこなく疲れて、その人影が闇のなかへ消えてゆくのを眺めていたのである。その人影は背に負った光をだんだん失いながら消えて行った。網膜だけの感じになり、闇のなかの想像になり―― ついにはその想像もふつり断ち切れてしまった。そのとき私は「どこ」というものがない間に微かなウ戦慄を感じた。その闇のなかへ同じような絶望的な順序で消えてゆく私自身を想像し、雲が沸き立っては消えてゆく空のなかにあつたものは、見えない山のようなものでもなく、不思議な神のようなものでもなく、なんという虚無！ 白日の闇が満ちあちちているのだということ。私の眼は一時に視力を弱めたかのように、私は大きな不幸を感じた。濃い藍色に煙りあがつたこの季節の空は、そのとき、見れば見るほどただ闇としか私には感覚でできなかったのである。

(注) 1 ノスタルジック——異郷にあつて離れた故郷を懐かしむ感じ。
2 Louis-l'etier——古代ギリシア伝説で、ロータスは実を食べると夢心地になってこの世の苦しみを忘れることができるといふ想像上の樹。その実を食べる人から転じて快楽主義者。

3 山嶽——山脈などをなす孤立している山岳の集まり。

問1 破線部ア・イ・ウについて、文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は、ア～ウの順に 7 8 9。

ア 勾配 ① 配色 ② 傾斜 ③ こだわり ④ 区切り

イ 平衡 ① どこまでも相交わらないこと ② 並んでいること

③ つりあいがとれていること ④ 同時に行われること

ウ 戦慄 ① おのき震えること ② 戦う気力 ③ 悪意 ④ 孤独感

問2 傍線部文中の空欄に入る適切な語句を次の群の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 10。

① あわただしい感情 ② 心休まる感情 ③ 悲しい感情 ④ わくわくする感情

問3 傍線部1・3に使われている表現技法として最も適当なものを、次の①～④のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は、1が 11、3が 12。

① 倒置法 ② 直喻(明喩)法 ③ 隠喩(暗喩)法 ④ 擬人法



問4 傍線部2「云い知れぬ深い感情」とあるが、この「感情」は、「私」にとってどのようなものであると考えられるか。この「感情」の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 13。

- ① 次々と生成して心の中に居続ける自分の力が及ばないものへの怒り。
- ② 後から後から浮かんでくる不安に打ち勝つてようやく手に入れた幸福感。
- ③ 心の中に思い浮かんで常に変化し続ける、頼りないが決して消えない希望。
- ④ 恐怖を感じながら地獄のようなところへ落ちてゆくのではないかという不安。

問5 傍線部4「云い知れぬ恐怖」とあるが、本文から考えられるこの内容を「恐怖」と「情熱」という言葉を用いて三十文字以内で説明せよ。解答は記述式解答欄⑩に記せ。

問6 傍線部5「この季節」として適切なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 晩春
- ② 三月の半ば
- ③ 真夏
- ④ 秋

問7 梶井基次郎の作品を、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 「檸檬」
- ② 「惜しみなく愛は奪う」
- ③ 「友情」
- ④ 「古都」